

〔報 告〕

ブータンの崖寺と瞑想洞穴(2)
—第4次調査の報告—

Cliff Monasteries and Meditation Caves in Bhutan (2)
—Report of the fourth investigation—

浅川 滋男・大石 忠正*・武田 大二郎*・吉田 健人**

ASAKAWA Shigeo OISHI Tadamasa* TAKETA Daijirou* YOSHIDA Kento**

要旨：チベット仏教ドゥック派を国教とするブータンでは、瞑想場としての崖寺 (*Druk Goempa*) が各地に造営されており、本堂ラカンから離れた崖の洞穴に瞑想施設 (*draph/tsamkhang*) を営む。ドゥック派によって国家形成がなされる17世紀以前、多くの崖寺に本堂ラカンは存在せず、ただ瞑想洞穴だけがあって、僧侶たちはそこで長期間の瞑想修行に没頭していたとされる。現在でも、若手の僧侶は修学時に3年3ヶ月3日の瞑想を洞穴で続けることが必須とされる。こうした瞑想と瞑想洞穴の実態を理解するため、これまで4次の調査をおこなった。第1～2次 (2012-13) は西ブータン、第3次 (2014) は東ブータンと中央ブータン、第4次 (2015) は中央ブータンと西ブータンで計15ヶ寺を調査している。昨年度の紀要では2014年までの成果を報告したが、今回は第4次調査の成果をとりあげる。第4次調査の対象はダカルポ・ヨウト寺 (パロ)、ケラニ寺 (パロ)、タンディネ寺 (ティンブー)、レモチェン寺 (タン) の4寺である。2014年までと異なるのはヒアリング内容で、2015年は崖寺の縁起等に加え、瞑想体験を中心とする僧侶のライフヒストリーについて長時間の聞き書きをした。このほか、ソンツェンガンボ王による吐蕃建国時 (7～8世紀) の造営と伝承される中央ブータンのジャンバラカンで、本堂内陣中央柱から放射性炭素年代測定サンプルの採取に成功した。その結果は1632-1666 cal AD (信頼限界74.4%) である。吐蕃の年代ではなく、ドゥック派による国家形成の時期を示した点、大変興味深い。ジャンバラカンの現本堂は国家誕生以後のものである可能性が高まった。

【キーワード】 ブータン、チベット仏教、密教、崖寺 瞑想 ジャンバラカン

Abstract : In Bhutan where *Druk* denomination is regulated as the state religion, cliff monasteries (*Drak Goempa*) as the meditation place are constructed in several districts, its meditation facilities called *draphu* or *tsamkhang* are established at the caves of the mountain cliffs. It is supposed that many monasteries had not the main hall (*lhakhang*), but only meditation caves, and the monks were devoted to long-term meditation practice at the caves, before 17th century when the nation state was founded by *Druk* denomination. Even nowadays, the young monks must continue the meditation in the cave for three years and three months and three days before graduation from Buddhism school. The first and second investigations (2012-13) were done in the west Bhutan, the third investigation (2014) was done in the east and central Bhutan, and the fourth investigation (2015) was carried in west and central Bhutan. As a result, we have investigated 15 monasteries in total. Since the harvest until 2014 was reported in our universities bulletin of last year, this time the authors pick up the product of 2015. In the fourth investigation, the authors explored such following 4 monasteries as *Drakharpo Youtok* and *Kela* nun monastery at *Paro*, *Tandinney* at *Thimphu* and *Remochen* at *Tang* valley. The difference between the investigation of 2015 and that before 2014 is contents of interview. At 2015, the authors did the long-time interview concerning not only the tradition of the monasteries, but also the life-history of the monks, mainly about the meditation experience. Besides, in *Jambay Lhakhang* monastery, which was transmitted to have been constructed by *Srongbtsansgampo* at the time when ancient Tibetan dynasty called *Tufan*

*環境学部4年次

**環境情報学研究科修士課程

was founded at 7th century. The authors succeeded to get the sample of radio-carbon dating from inner sanctum central pillar of the main hall. The result is 1632-1666 cal AD (reliable limit 74.4%). It is very exciting that the result points not the foundation time of *Tufan* dynasty, but the time after the foundation of Bhutan national state. It is very possible that the present main hall of *Jambay Lhakhang* monastery was constructed after the birth of the nation.

【Keywords】 Bhutan, Tibetan Buddhism, Esoteric Buddhism, Cliff monasteries, Meditation, *Jambay Lhakhang*

1. 2015年度の活動

1-1 メンバツォとペマ・リンパ

(1) 炎立つ湖

2015年8月29日、ブータン第4次調査隊^{*1}一行は、中央ブータンのタン溪谷に潜むメンバツォ (*Membar tsho*) を訪れた(図2・参考サイト11)。ブータン仏教の古派(ニンマ派)を中世に復興した高僧ペマ・リンパ(1450-1521)の伝説が残る景勝地である。その伝説の概要を述べておく。ある夜、ニンマ派の開祖グル・リンポチェが夢にあらわれ、ペマ・リンパに自ら隠した宝物の在処を教えた。ペマ・リンパは衆目が見守るなか、バターランプの松明を手にして暗い溪流の淵に飛び込み、水底から仏像・経典などの宝物を携えて戻ってきたのだが、驚いたことに、水中に沈んだ松明がなお赤々と燃えていたという^{*2}。そうした宝物探しの実績が評価され、ペマにはテルトン (*terton*) の称号が与えられた。宝探しに長けた僧侶がテルトンであり、ペマはテルトン・ペ

マ・リンパと呼ばれるようになる。

ところで、ゾンカ語のメンバツォ (*Membar tsho*) は「燃える湖 (burning lake)」あるいは「炎立つ湖 (flaming lake)」と英訳されている。上の伝承に因んだ呼称ではあるけれども、厳密に言えば、メンバツォは湖ではなく、溪流の淀みである。じっさいに訪れてみると、予想よりもはるかに小さな淵であることに驚く。その淵は巨岩でかまされ、上空におびただしい数の五色旗タルチョがはためく(図3)。また、巨巖の深い岩陰におびただしい骨小塔ツァツァ (*tsetse*)^{*3}を安置し、その脇の岩陰で高僧が香を焚き読経しており、ニンマ派復興に因む場所としての聖性を存分に発揮している。

メンバ・ツォの周遊には時間を要するだろうと予想していたが、淵まで歩いて行って帰るだけだから時間はかからない。そこから車に乗り、谷筋に沿って車を上流にむかわせた。ブータン周辺は標高2,500~2,600mの山嶺に松林がひろがっている。マツタケの大産地である。松



図1 第4次調査(2015)調査位置図 *参考サイト15をもとにリライト

林のないところでは牧草地が多く、その間に赤紫と黄色の菜園が点々とみえる(図4)。赤紫は蕎麦の花、黄色は芥子(からし)の花である。そうした車窓の風景を1時間ばかり楽しみながら北上し、ウゲンチョリン博物館*4に到着した。目的はクンサン・チョデン(Kunzan Choden)女史に会うことである*5。



図2 メンバツォー炎立つ湖一



図3 タルチヨ(メンバツォ)



図4 芥子畑(手前)と蕎麦畑(奥)



図5 ウゲンチョリン博物館(旧領家楼閣)

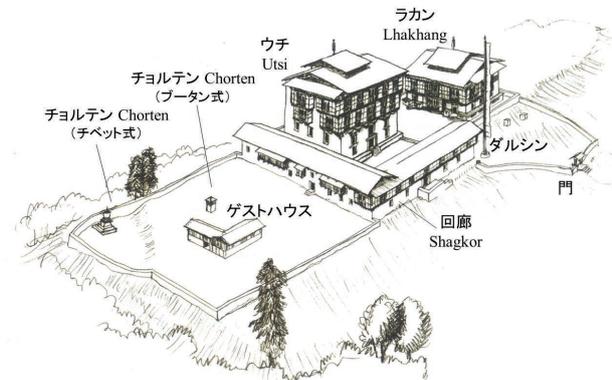


図6 ウゲンチョリン博物館 パース

*図6-9は注8文献から転載、一部編集

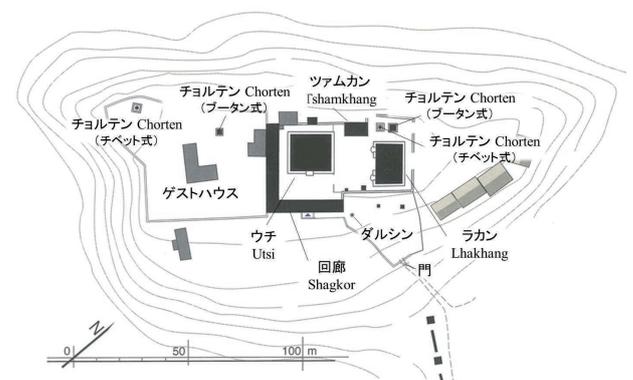


図7 ウゲンチョリン博物館 屋根伏図

1-2 ウゲンチョリンの領家を訪ねて

ここ2年ばかり、演習を活用してプータン民話(絵本)の翻訳に取り組んでいる。きっかけは第3次調査(2014)の際にプータンの土産物店でみつけた絵本“*Membar tsho -The Flaming Lake*”であった*6。この絵本は上に述べたメンバツォの伝承を子どもむけに分かりやすくリライトしたものである。作者のクンサン・チョデンは、プー

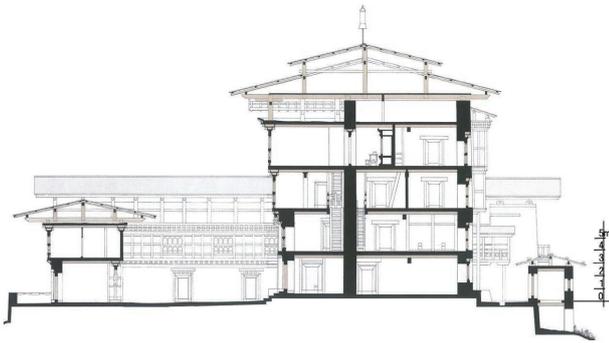


図8 ウゲンチョリン博物館 断面図

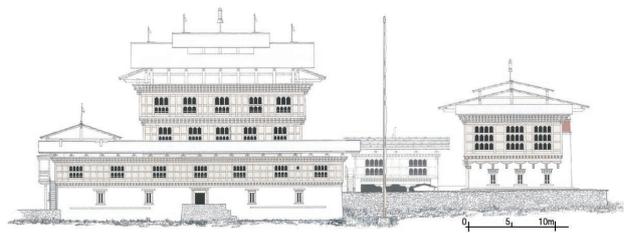


図9 ウゲンチョリン博物館 西側面図



図10 展示物 (博物館内)



図11 クンサン・チョデン女史 (ウゲンチョリン博物館)

タン初の女性作家であり、民話研究の第一人者としてよく知られている。女史は中央ブータン・タン溪谷のウゲンチョリン領主の娘として生まれた。領主の娘であるがゆえに幼少時から孤独をもてあまし、ひとりぼっちの時間を民話の聞き語りにも費やした。インドなどに留学して社会学・心理学を学び、長期にわたってブータンを離れていた少女時代にも、民話は孤独や憂鬱をいやす慰めになり、自分のアイデンティティを再認識させるものであったという^{*7}。

女史が幼少の9年間を過ごしたウゲンチョリンの領家(領主の館)がいまは民俗博物館として再生されている。領家は小型の城(ゾン dzong)である。中央に配した楼閣ウチ utsi を回廊状の長屋が囲む形式で、一部に仏教僧院を含む。楼閣は政務と接客の空間、長屋は家族の居住空間である。

ウゲンチョリン領家の創建は16世紀まで遡るといわれるが、大火にあって19世紀に再建されている。最も大きな画期は1957年であった。近代ブータンの父、第3代国王ジゲミ・ドルジ・ワンチュク(在位1952-1972)は従来の鎖国政策を廃止し、個人の土地所有を制限して余剰財産を国民全体に分配した(参考サイト13)。この政策に従って、クンサン家は領主の地位を失うが、その後も、この小型ゾンはクンサン家の居宅であり続けた。2005年

より中央の楼閣部分が展示施設に模様替えされ、領家の宝物・民具等が陳列されて民俗博物館が開館する。2014年から四周の長屋をゲストハウスに改装するため、家族は別の家に引っ越し、現在も整備が進められている。

ウゲンチョリン博物館でクンサン夫妻と面会し(図11)、絵本“*Membar tsho -The Flaming Lake*”の和訳本^{*9}を贈呈し、夫妻との交流を深めた。事情を説明したところ、女史は大変喜ばれ、和訳本の日本での正式な出版を依頼された。さらに博物館内のブックストアで、女史の著作・絵本を購入し、それらの和訳を進めることも約束した^{*10}。その後、博物館を隅から隅までご案内いただいた。自家製の裸麦焼酎アラッでおもてなしを受けた後に門をでると、村人が集まって経典旗ダルシンづくりをしている。ダルシンは経文を書き連ねた旗であり、ブータンでは寺院や墓などの聖域だけでなく、田畑の畦や路肩など至るところに立てられている。その数は非常に多く、ブータンの地全体が仏国土であるという印象をアピールしている。ダルシンは10年で建て替え、ウゲンチョリンでは毎年10月がダルシン更新の季節である。来たる10月の更新に向けて村人一同が総長10mほどの丸太を削り、その支柱を立てるための基礎づくりを終えたところであり、多くの男たちはアラッで喉を潤し、体を休めていた。

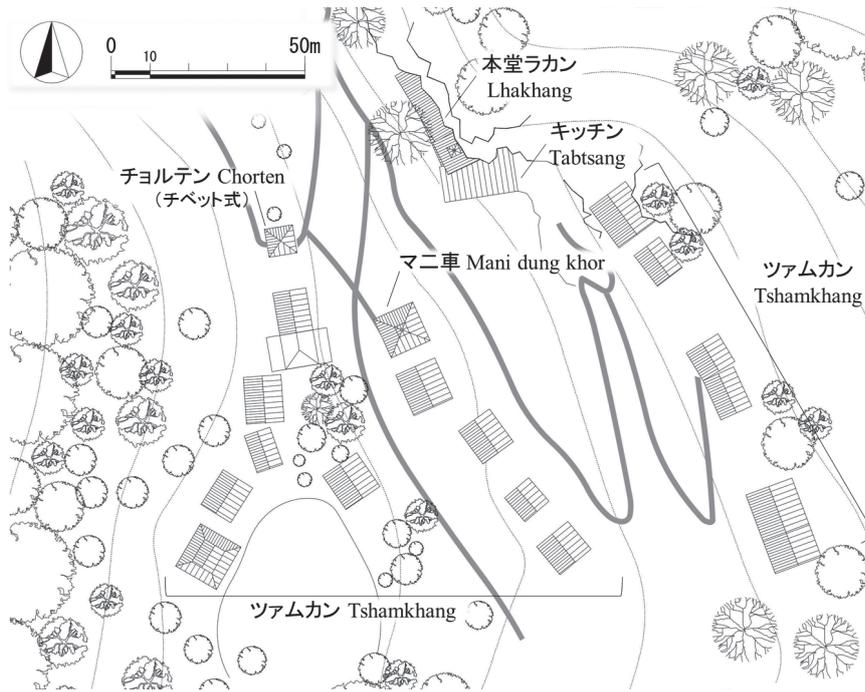


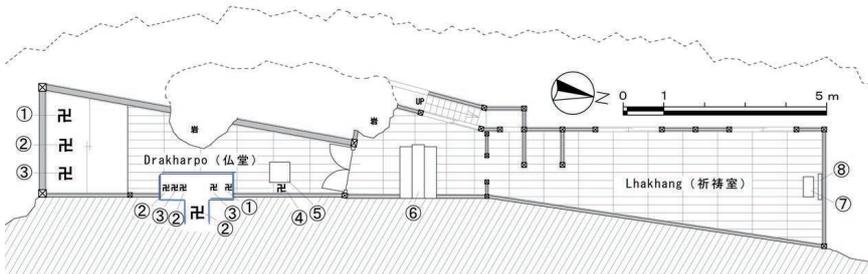
図17 ヨウト寺 屋根伏図(筆者測量・作図)



図18 ヨウト寺本堂 木梯



図19 ヨウト寺本堂 木梯



- ① Avalokiteśvara Bodhisattva(観音菩薩) ⑤寄進台
- ② Guru Rinpoche(グルリンポチェ) ⑥燭台
- ③ Ekādaśamukha(十一面観音) ⑦供台
- ④ Drakharphen(ダカルチェン) ⑧ゲルの絵

図20 ヨウト寺2階本堂平面図(筆者実測・作図)



図21 ヨウト寺本堂 礼拝室

菩薩と十一面観音菩薩を配する。また、岩が内側に突き出ているところにもグルや釈迦如来、観音菩薩などを祀る。さらに注目すべきは仏堂中央下の小さな洞穴である(図20の㊦)。洞穴のなかに銀色のゲルの像を納めている。それは八相変化のうちのペマジュネの像であり、上述した寺の縁起を物語っている。

2-2 タンディネ寺

(1) イセ・ソゲルの伝承

タンディネ (Tandinay) 寺は首都ティンプー市街地の北郊山中に境内を構える。小規模の僧院である(標高2,500m、図22~25)。グル・リンポチェの妻、イセ・ソ

ゲルがこの地で瞑想したという伝承を残す。イセが「私も悟りを開きたい」とグルに懇願したところ、グルは「悟りを開くには私の教えに従い修行すればよい」と答えた。イセはそのとおり熱心に修行したが、悟りを開くに至らなかった。ある日、イセはティンプーの街を訪れた。その際、街には雨が降っていたが、タンディネの崖のまわりは快晴だった。一方、ティンプーの街が太陽に照らされているときにタンディネだけは雨が降るという不可解な現象が起きた。タンディネにはなにがしら神秘的な力が宿っているのではないかとイセは思い、そこで瞑想することにしたという。

タンディネという呼称は新しくつけられたものであ



図22 タンディネ寺 外観



図23 ツァツァ (山道)

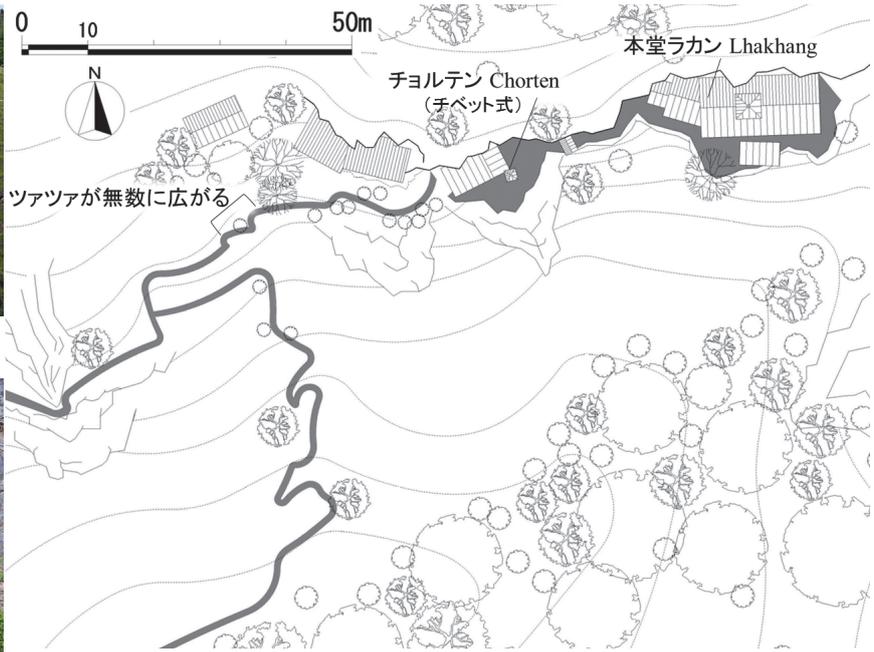
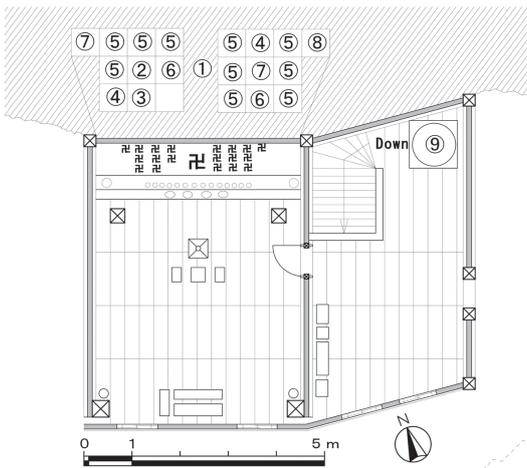


図24 タンディネ寺 屋根伏図 (筆者測量・作図)



- ① *Guru Choki Dorji* (グル・チョキ・ドルジ)
- ② *Dorji Senba* (ドルジ・センバ)
- ③ *Guru Pema Jungne* (ペマジュクネ)
- ④ *Avalokiteśvara Bodhisattva* (観音菩薩)
- ⑤ *Guru Tsen Gye* (グル八相変化)
- ⑥ *Zhabdrung Ngawang Namgyel* (シャブドゥン・ガワン・ナムゲル)
- ⑦ *Gautama Buddha* (釈迦如来)
- ⑧ *Sayuge Yopame* (サユゲ・ヨパメ)
- ⑨ *Mani dung khor* (摩尼車)

図25 タンディネ寺 本堂2階内陣 略平面図 (筆者歩測・作図)

る。古くはヤルン・シャリドラ (*Yalung Sharidrak*) と呼ばれていた。チベットにも同様の地名がある。チベットの地名を類似の地形にあてはめる場合がブータンではしばしばある。イセ・ソゲルはそうした地形の類似性に注目してこの場所を訪れたとも伝える。当時、ここには悪霊が棲みついていた。馬の頭と悪魔の体をもつ奇妙な姿の悪霊である。イセが瞑想によってこの悪霊を浄化すると、顔はグルリンポチェ八変化のうちのペマジュネ、体はドゥク派の高僧デッセイ・ツェワン・テンジン (*Dessey Tsewang Tenzin*) の姿に変わった。頭はニンマ派、体はドゥク派という外観は、タンディネ寺が前者から後者へ改宗したことを暗示している。

こうして悪霊はティンブー谷の守り神に変身した。タンドリン (*Tamdryn*) と呼ばれた悪霊は、瞑想による浄

化後、タンディン (*Tandine*) という名の本尊に変化した。ティンブーにはタンディンという名をもつ子どもが多い。それは谷の守り神に因むからである。

(2) 境内の構成

ティンブー市街地につながる舗装道路はコンクリートの新しい僧院で行き止まりとなる。そこから険しい山道を2kmばかり歩いていくと、チベット式チオルテンが視野に納まる。さらに、チオルテンの向こうに本堂ラカンの姿もみえる。チオルテンに至る直前には山の斜面におびただしい数の骨小塔ツァツァがひろがっていた。シャブドゥン・ガワン・ナムゲルによる17世紀の国家形成以前に、チベットからやってきた高僧ドルジ・センバが本堂ラカンを建立したという。当初、岩崖の洞穴に建

物をはり付けていたが、17世紀後半にキンケン・ペマ・カルポが洞穴からやや距離を置くように再建した。洞穴はもちろん今でも存在するが、とても危険な場所にあり、斜面に柵を設けて接近できないようにしていた。

本堂ラカンは小規模なものだが、内陣内部に4本の角柱を立てる。通常、この規模なら2本柱とするが、この本堂では2本の柱を2列に立てている。本堂は2008年に床の一部を修理し、塗装を塗り直した。壁画には古いものが残っている。ただし、壁画の腰板などに大改修を施した箇所がみうけられた。

内陣の奥にはガラス張りの厨子に数多くの仏像が祀られている。中央には、グル・リンポチェ八変化の一つ、グル・チョキ・ドルジ (Gul Choki Dorji) の顔像と17世紀前半に寺を再建したキンケン・ペマ・カルポの坐像が鎮座する。向かって右側の棚は、釈迦如来を中心にしてみわりをグル・リンポチェ八変化像やシャブドゥン・ガワン・ナムゲル、サユゲ・ヨパメの像を配列する。ヨ

パメはブータンでよく知られた高僧である。向かって左側の棚は、ドルジ・センバを中心にまわりをグル八変化のペマジュネやシャブドゥン・ガワン・ナムゲル、観音菩薩、釈迦如来が囲む (図25)。

2-3 ケラ尼寺

(1) 尼僧の大学

パロ市街地から西岡京治チョルテンとゾンドラカ寺*18を経由して、さらに一時間以上山道を南西方向に車を走らせるとケラ・ゴンパ (Kela Geompa) に至る。標高は3,800mで、タクツァン僧院 (標高3,050m) よりはるかに高い位置にあり、周囲はイトスギ林に髭のような苔チャイラップの絡む独特の植生がひろがる。

ケラ・ゴンパは17世紀にドゥク派の僧侶、ドゥプトブ・チェカワ (Dupthop Chekawa) が開山した尼寺である。たんなる山寺ではなく、現在は尼僧養成のための高等教育機関 (Nun's Higher College) としての役割を担って



図26 ケラ尼寺 外観



図27 絶壁にはりつくケラ尼寺の長屋群 (懸造)

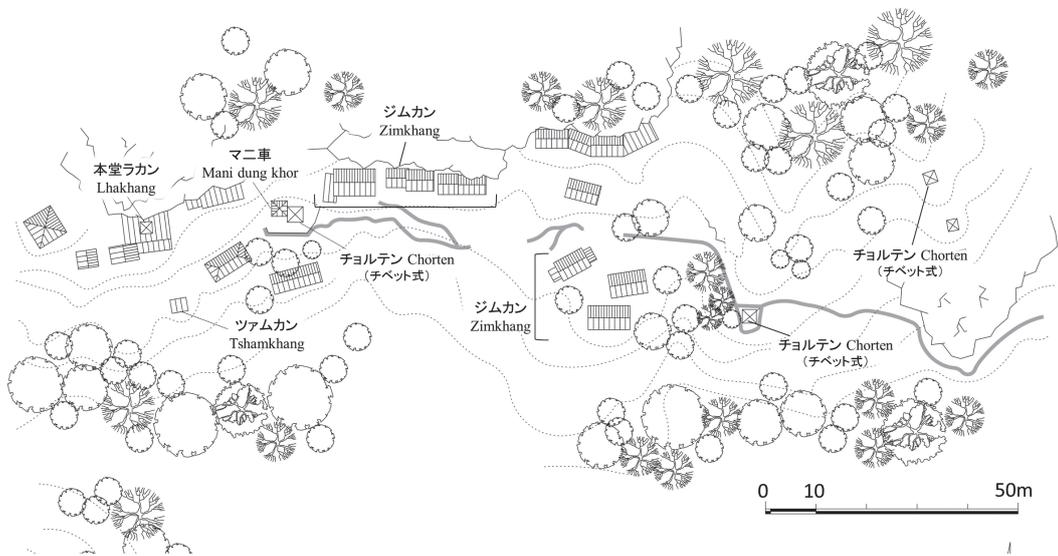


図28 ケラ尼寺 屋根伏図 (筆者測量・作図)



図32 山門と巨巖 (レモチェン寺)



図33 燭屋 (レモチェン寺)

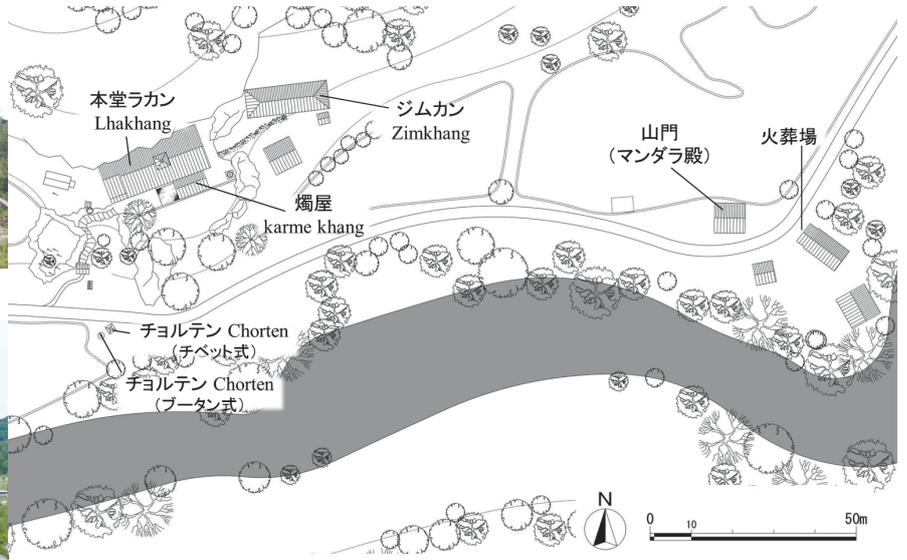
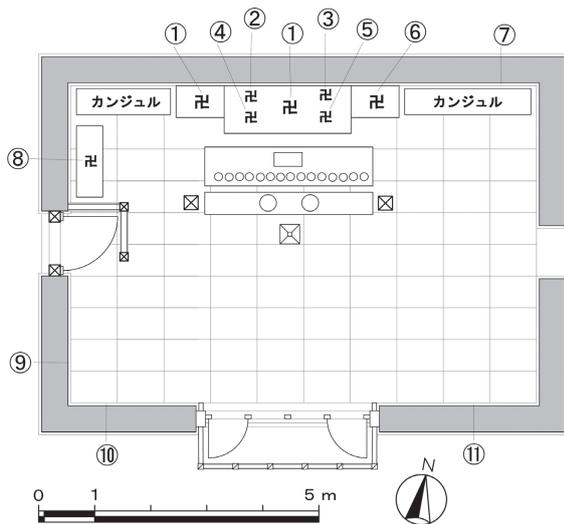


図34 レモチェン寺 屋根伏図 (筆者測量・作図)



- ① *Guru Rinpoche* (グル・リンポチェ)
- ② *Ekādaśamukha* (十一面観音)
- ③ *Zhabdrung Ngawang Namgyel*
(シャブドゥン・ガワン・ナムゲル)
- ④ Comfort (中国人)
- ⑤ Comfort (ネパール人)
- ⑥ *Guru Tsen Gye* (グル八相変化)
- ⑦ ダライラマなどの写真
- ⑧ タン溪谷の守護神
- ⑨ グル八相変化の壁画
- ⑩ ニンマ派の壁画
- ⑪ ドウクパ・カギユ派の壁画

図35 レモチェン寺 本堂2階内陣 略平面図 (筆者歩測・作図)

く、やや隙間をあけている。2階の内陣は2本柱を立て、仏像・仏画を祀る。内陣の中央奥にグル・リンポチェ、その右にシャブドゥン・ガワン・ナムゲル、左に十一面観音を配する。また、グル像の前方下側には中国人とネパール人の妻 (comfort) の像も置く。これら5体の仏像の両脇にはドルジ・ドロ (*Guru Dorje Drolo*) などグル・リンポチェ八変化の小像も配する。内陣の壁にはグルの八相変化を描くニンマ派の壁画とともに、ドウク派の壁画もみられ、改宗の過程を読みとることができる。このほか、入口の隣にはタン溪谷の守護神、部屋の隅にカンジュルの収納棚を置く。カンジュルとは、釈迦の教えがやさしい言葉で書き直された経文であり、外側は布でくるまれていた。

本堂の前には燭屋 (*karme khang*) を設ける。2007年に建てられた新しい建物である。内部に多くのバターラ

ンプを並べている。参拝者が持参するバターランプは本来、本堂の内部に納めていたが、訪問者の急増による火災の危険性からバターランプ専用の施設を本堂に近接して設けたという。チベット仏教では寺院や住宅の仏間でバターランプを灯す。銀製の器に木綿を燃った芯を立てバターを流し入れる。ランプのバターはヤクや牛の乳で作ったものだが、最近では植物性油に変わってきている。各家庭でも火を絶やさないよう灯しており、法要の際には108個のバターランプに火をつけて祈祷する。

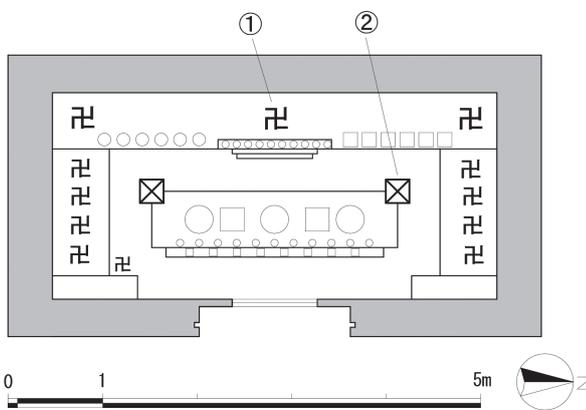
このほか、大きな建物としては長屋ジムカンがあるだけで、瞑想施設ツァムカンを含まない。瞑想は谷奥のトワドラ寺の洞穴を使うのだという。この点、レモチェン寺はトワドラ寺の末寺格と言えるかもしれない。住職一人だけで瞑想施設のない小寺だが、ひっきりなしに農民が訪れて礼拝し、本堂の軒下にたむろしている。



図36 ジャンバラカン門前入口



図37 ジャンバラカン本堂 外観



① maitreya (弥勒菩薩)
② サンプル採取位置 (本堂内陣 2 本柱のうち北側 1 本)

図38 ジャンバラカン 本堂内陣 略平面図
(筆者歩測・作図)



図39 サンプル採取位置 (図38-②に対応)

3-2 ジャンバラカンとクルジェラカン

(1) ジャンバラカン本堂内陣柱の年代

すでに述べたように、7世紀に吐蕃を建国したソンツェンガンポ王はヒマラヤ山麓に12の僧院を築いた。ブータンでは、プンタンのジャンバラカン (Jambay Lhakhang) とパロのキチュラカン (Kyichu Lhakhang) がソンツェンガンポ創建の寺院と伝承されている。一般にブータンの僧院では17世紀の国家形成期以降に仏像を安置する本堂が建立されると言われるが、ソンツェンガンポ創建の僧院は密教伝来以前の寺院であり、当初から本堂を備えていた可能性がある。

ジャンバラカン境内及び本堂の規模はさほど大きくはない。門 (図36) をくぐると四方を建物で囲まれた中庭へと続き、正面に本堂があらわれれる (図37)。本堂は内陣と外陣の境に分厚い壁を挟み、内陣は2本柱で、柱は特殊な面取の断面をしている。正面に弥勒菩薩を祀る。内陣の出入口の小壁に採光窓があり、窓に背を向け、弥勒菩薩と向かい合うようにグル・リンポチェの像を配す

る。8世紀以前と伝承される建造物は本堂の内陣のみであり、外陣は後世の増築もしくは大改修と推定される。この年代観を検証する方法を熟知していることを丁寧に説き、さらに一定の寄進をしたところ、放射性炭素年代測定サンプル採取の許可をいただいた。対象は本堂内陣2本柱のうち北側の柱である (図38②)。柱は木肌の上を布で覆って赤く塗装している。しかし、床面から10cmほどの高さまでは木肌が露出しており、床からの高さ8mmの位置で、南面の南西隅から年輪を数え、6年輪のみを確認した。そこで、一番外側から3年輪のみ採取した (図39)。

帰国後、パレオラボ社に AMS 法放射性炭素年代測定を依頼した。年代測定の結果は以下の通りである^{*19}。

◎ジャンバラカン本堂内陣2本柱【AMS単体】

- 最外年輪年代 (部位不明)・樹種不明
- 1526-1555 cal AD (信頼限界16.3%)
- 1632-1666 cal AD (同上74.4%)
- 1784-1795 cal AD (同上 4.7%)

